# 平城宮建築復原模型（昭和41年度）

建造物研究室
平城宮跡発掘調査部

昨年度にひきつづき、内裏東第一殿・同第二殿・内裏掘立柱回廊延長部・内裏閤門および築地回廊南辺部の4種類の復原模型を製作した。設計、製作にあたっては、前回同様発掘結果にもとづき原案を作製し、それによって種々検討を加え実施案を得、作製にとりかゝるという方法をとつた。こゝでは、おのおのの建物について設計の段階でのよりどころとした点についてふれてみたい。

## A、内裏東第一殿・同第二殿

昭和36年～38年に発掘した内裏正殿前庭の東側南寄りの南北棟、5間×2間（第一殿）・9間×2間（第二殿）の建物で、平安宮での宜陽殿・春興殿にあたり、西側の対称の位置にも同規模のものがあるはずである。

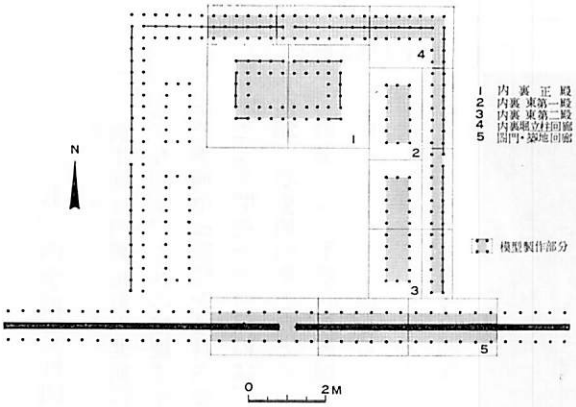
2棟とも、梁間を2間としそれを桁行に延長するだけの単純なプランをもち、柱間寸法は、内裏正殿・内裏掘立柱回廊とおなじく内裏内郭一帯の地割りである10尺方眼にのつている。

これらのことから、2棟はたゞ桁行の柱間数が異なるだけで他はすべて同規模のものと考え、つぎのような構造であつたとみた。

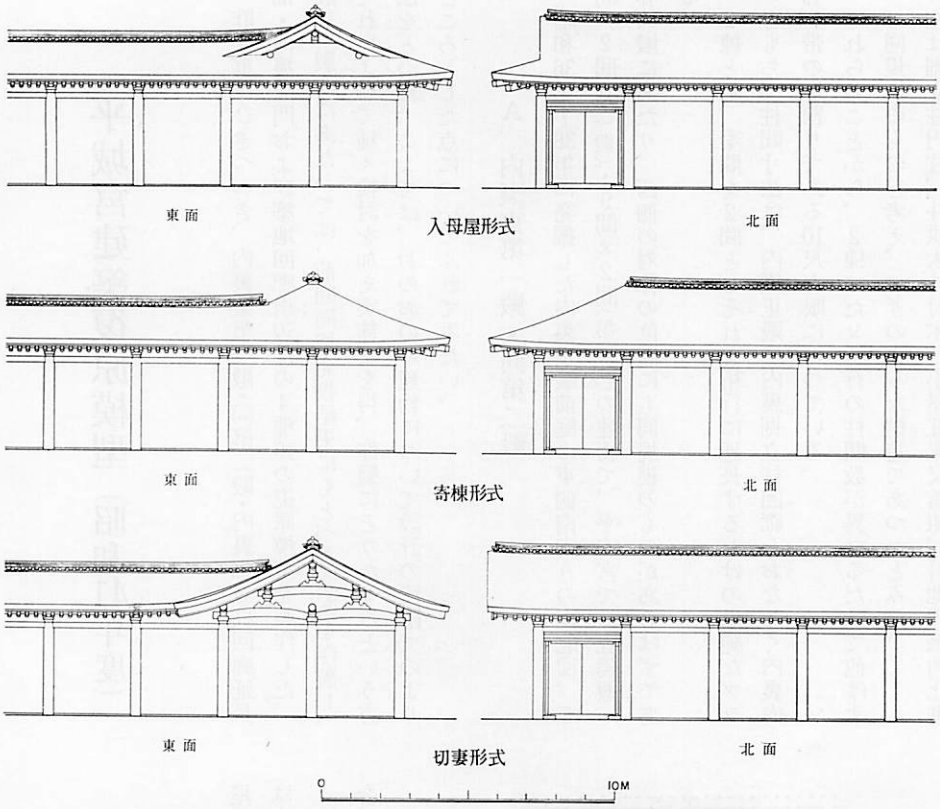
柱は掘立柱円柱、斗栱大斗肘木、小屋虹梁叉首組、軒地円飛角化粧屋根裏、屋根切妻造桧皮葺、棟いらか瓦積、柱間装置両妻のみ土壁他は吹きはなし、床土間玉砂利敷き、木部素木仕上げ、木口胡粉塗り。

柱間装置については、建物の使用目的の解釈によつていろいろな場合が考えられる。例えば、伊勢神宮の外宮にみるごとく正殿に対する納庫的なものとみれば、当然完全な外壁が必要になるが、こゝでは内裏における儀式に必要な建物であるとの考えの上にたつた。遺跡には、柱穴のみあつて床束が存在したような跡が全然みられなかつたこともこの傍証になりうる。

妻壁は、春日神社着到殿を範とし、柱間に低い腰貫をいれ上部を土壁、下部を吹きはなしとした。




第1図　内裏内郭部分模型配置図



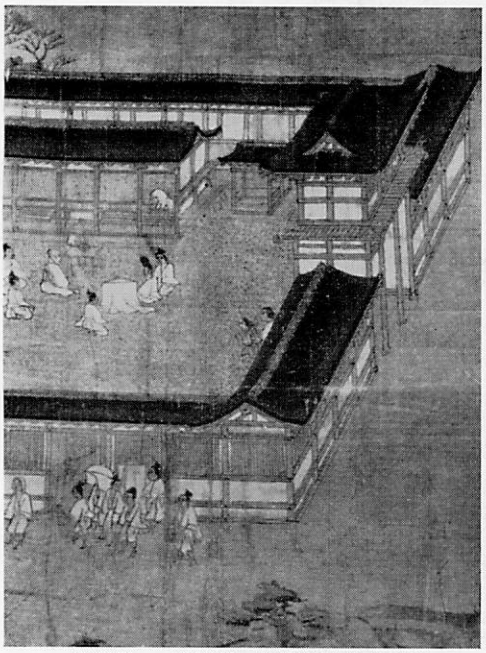

第2図　内裏掘立柱回廊東北隅3形式

## B、内裏掘立柱回廊延長部

前年度は内裏正殿の北側に位置する複廊14間分を製作した。今回は、これに接続する複廊6.5間分と、直角におれまがる東側単廊22間を延長させた。

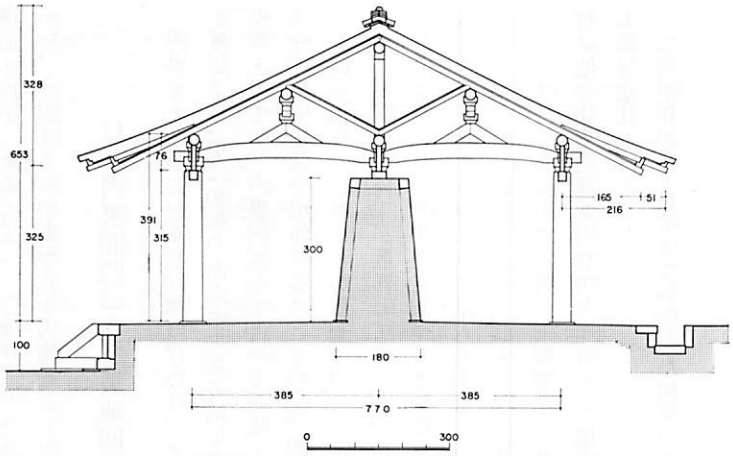
こゝで問題となつたのは、高さのちがつた屋根が相接する南端での築地回廊とのとりつき部分と、東北隅部分とである。

南端部は、築地回廊と掘立柱回廊とが、それぞれ構造的にも異なり、柱間寸法もちがい距離も広くなつているので全く別個の屋根であつたと考えてもそれほどの矛盾はない。発掘結果からみても両者の関係は、雨落溝が接続していることゝ



第3図　一辺聖絵　熊野新宮参詣の図

回廊西側の柱通りがたまたま築地回廊の柱位置と揃つているぐらいであつてさほど密接さはない。しかも回廊南端の柱と、築地回廊北側の柱との距離は、いずれの柱間とも一致せず独自の数値をもつている。このことからして、回廊屋根は南端柱を妻とした切妻造りと考えられた。しかし、その結果築地回廊の軒と掘立柱回廊けらばとの間に、わずかながら空隙が生じるということにもなつたのである。



第4図　内裏築地回廊復原断面図

東北隅については、同じ構造の複廊と単廊とが接続するので、単廊の棟は複廊屋根の丁度½の高さにとりつくことになる。その形式として次の三つの案が考えられた。

1、入母屋形式

複廊単廊とも軒高さは同じであるから、出隅入隅に隅木をいれ軒をまわし、入母屋の妻を東にみせる。この場合入隅々木尻は単廊棟木と複廊南流れ中間母屋との交点にかゝり、出隅々木尻は同じく単廊棟木と複廊北流れ中間母屋との交点にかゝる。しかも、奈良時代建築構造の通例として、叉首台を別個に構えない構造とすると、単廊棟木が叉首台の役をも兼用し、地棰をうける棟木としてより別に過重な負担をになうことになつてくる。現存する遺構にも二・三の例をみるがこれらは野小屋をもうけて、妻組と化粧軒との関連が全くなくなつての結果である。

したがつて入母屋とする案は最良とはいゝがたい。

2、寄棟形式

入母屋同様軒を出隅入隅とも同じ高さにまわす。隅木は、出隅では軒から複廊棟木までいつきにのぼり、入隅では単廊棟木と複廊南流れ中間母屋との交点にかゝる。しかもなお両者の隅木尻をむすぶ線にも隅木が必要である。法隆寺西院回廊でみるごとく、相接する棟が同規模、同高であれば両方の隅木は棟で組みあわされるだけであつて比較的簡単な見上げとなるが、棟高さがちがう場合はやゝ繁雑になるという難はさけがたい。

3、切妻形式

複廊が妻柱まで延びて切妻を構成し、それに単廊がとりつくもので考え方としてはもつとも単純な形であるといえる。

時代は降るが（正安元年1299）『一辺聖絵』中、熊野本宮境内図に楼門にとりつく回廊の角にこの形式をみることができる。勿論この絵からは、内部構造まではわからないが、とにかく軒高が同じでしかも棟高の異つた回廊接続の一形式を示しているものである。

構造が簡単であることゝ、三案中もつとも考え方に無理がないところから、今回はこの切妻形式を実施案とした。

## C、内裏閤門および築地回廊南辺部

内裏をとりかこむ築地回廊の存在は、すでに36年の発掘でその東側が確認され、更に40年の南面中央部の補足調査で閤門跡が検出された。模型としては、内裏内郭をまとめる意味もあつて閤門を中心に西へ5間分、東へ14間分製作するにとゞめた。閤門は、内裏中軸線上で築地が1間分切れていることから一戸門であることがわかり、また内側3間分に凝灰岩の粉末が散布していることから、この部分が凝灰岩敷きであつて門としては3間であつた可能性を強くした。したがつて門の両脇それぞれ1間分に築地が入りこむという形になつた。屋根高さについては積極的根拠はなかつたが、門部分を一段高くし築地との間に差をつけた。小屋組は閤門、築地回廊ともに、虹梁束組、三ツ棟造、軒は他の建物同様地円飛角の二軒とし、屋根は桧皮葺、棟いらか瓦積、木部丹塗仕上げとした。

なお昭和40年・41年度で製作した模型の概要は下表のとおりである。

（細見啓三）

| 名称 | | 構造形式 | 規模 建築面積 ㎡ | 規模 棟高 m | 規模 台面積 ㎡ | 製作年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 朱雀門 | 本体 | 桁行5間梁間2間二重入母屋造本瓦葺 | 初重 2,549 | 1,846 | 18,177 | 40 |
| | 築地 | 西方長さ1,287m東方長さ2,286m築垣本瓦葺附脇門 | 1,133 | 0,630 | | |
| 内裏正殿 | | 桁行9間梁間5間一重入母屋造檜皮葺 | 4,050 | 1,248 | 11,290 | 40 |
| 内裏掘立柱回廊 | 複廊 | 桁行20.5間梁間2間切妻造檜皮葺 | 5,637 | 0,600 | 12,457 | 40 41 |
| | 単廊 | 桁行22間梁間1間切妻造檜皮葺 | | 0,525 | | 41 |
| 内裏東第一殿 | | 桁行5間梁間2間一重切妻造檜皮葺 | 0,885 | 0,674 | 3,304 | 41 |
| 内裏東第二殿 | | 桁行9間梁間2間一重切妻造檜皮葺 | 1,593 | 0,674 | 4,960 | 41 |
| 築地回廊閤門 | | 桁行3間梁間2間一重切妻造檜皮葺 | 0,952 | 0,760 | 11,259 | 41 |
| 築地回廊 | | 西方長さ3.5間東方長さ12.5間梁間2間一重檜皮葺 | 4,828 | 0,655 | | |
| 計 | | | 21,627 | | 61,447 | |

○棟高は柱石口より棟積上端までの寸法